

「令和の禁酒令」の先

耕論

人と人つなぐ酒場再び



1965年生まれ。尾畑酒造専務。映画配給会社勤務を経て、95年に家業を継ぐ。真野鶴は約1割が輸出向け。

尾畑 留美子さん 「真野鶴」5代目蔵元

酒はもともと神とつながる。ととか、黙っている方が無難ツールでした。飲んだときの高揚感が「神様に近づくと」思わせたのでしょうか。ヨーロッパで修道士がワインを造ったように、僧侶が酒を醸した時代もありました。

神様にだっって近づけるのだから、酒には人と人をつなぐ力があります。現代に至るまで、酒場はそんな役割を担ってきました。

けれどコロナで、酒場の灯が消えつつあります。私たちの酒蔵がある新潟県佐渡市は緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象ではありませんが、各地で多くのお祭りや行事が中止になり、会合は激減しています。あらためて思うのは、酒場が育んできたものの大切さです。

私たちは互いに「空気感」を読んで暮らしています。ここでこんな発言をすると白け

るとか、黙っている方が無難だとか、周囲の人が発する空気を意識して行動します。

ところが酒場では、そうした空気を読む力が、良い意味で鈍感になることがあります。喫茶店で隣の席の会話に興味を持って、話しかける人はほとんどいないでしょう。でも酒場なら許される雰囲気があります。ここに新しい出会いが生まれます。

酒がもたらす高揚感は、自らが空気を醸す力を与えてくれます。しらふで語ったら「無理かな」と思う夢や希望も「できるかもしれない」と思わせてしまう。そんなエネルギーが酒場にはしばしばあふれています。

酒場で話していてアイデアが浮かび、箸袋やコースターにメモしたことはありませんか。翌朝読み返すと、なにが書いてあるのかわからないも

のも多いですが、10のうち一つか二つはおもしろかったりします。会議室ではサイン通り投げるボールも、酒場ではどこに飛ぶかわからないピンポン球になる。だれでも参加できるフリーセッションのような会話から、予定調和ではない世界が開ける。キテレツだけど秀逸なアイデアは、酒場で生まれることも多い気がします。

コロナでは、酒場など店の収入が消えるだけでなく、酒はもちろん様々な農水産物が行き場を失うなど、経済的な損失は大きい。雇用にも深刻な影響が出ています。

酒蔵は、農家や酒販店、飲食店、宿泊施設などをつなぐつて、地域の経済を支える存在でもあります。コロナをきっかけに「人と人をつなぐ」という酒の役割に改めて気づきました。コロナ以前には当たり前だった酒場の日常も、失ってみて、特別な場だったと感じます。

コミュニケーションが取りづらくて人々が引き裂かれていくいま、酒場が再び多くの人と人をつなぎ、新しい世界を生きる知恵が生まれることを願っています。酒場への感謝を込めて。(聞き手・岸善樹)